

心理学の時代の流れ

健康科学大学福祉心理学科 教授

牧野順四郎 (まきの じゅんしろう)

学生時代のことを思い出すのだが、もう50年以上も前ということに自分でまず驚く。先生方の言い方は「心理学は若い学問で、これから科学になろうとしている」と、こんな感じだった。若手の先生方や院生は全身にその気概があふれていた。ワトソンやハルの名前を聞かなかった日はないほどの雰囲気であった。たとえば、ハルの理論化と体系化は完成できると信じ、心理学の前途は明るかった。そんな中、私が当時最先端領域ともいべき動物心理学へ足を踏み入れたのも不思議に思わなかったし、むしろ自然だった。

いつしか年が流れ、特にここ十数年間心理学の勉強も研究も遠くなった現在、遠くからみる心理学の雰囲気はすっかり変わった。動物心理学の領域でも認知心理学的研究へと軸足を移していく様子はこの目でみたが、多くの他の領域でのそれは本誌『心理学ワールド』で結構わかる。全体の雰囲気を一言でいえば、心理学は分かり易い内容(表現も)と実用的話題に満ちている。私の学生時代にこれらはある意味タブーと感じられた。今では驚くような話だが、当時臨床心理学の講座はなかった。基礎の心理学の実験研究のほうが応用・実践の臨床心理学の研究よりも偉かったのである。

1960年から2015年までの約50年で、これが逆転の様相を呈していることは驚くというか面白い。ちなみに1960年の50年前となると、心理学を何とか整理して体系的にまとめあげたジェームスの死後、ワトソンが心理学に大胆に「行動」を持ち込んだ頃になる。1960年より前の50年は私にとっては歴史上の遺跡のようなものだが、後の50年と時間的には同じなので、不思議な気がする。

昔、先生方は基礎と応用の在り方として、基礎を固めて応用に役立てる、あるいは、応用から起きる問題を基礎系に提起することで、心理学は循環的に発展する、と言ったりした。前者の言い方では実用や応用は出てこないのが、後者が素直な言い方である。しかし、これまで逆転が2つ起き元に戻ったのを見た人はいない。私が見たものは、基礎から応用への一回りである。あと4, 50年で応用から基礎への循環が起きるとき、基礎の何がその逆転を受け止めたのか、そして心理学の循環的な発展が確かに起きることをこの目で見たいものです。



Profile 一牧野順四郎

1967年、東京教育大学大学院博士課程実験心理学専攻単位取得退学。学術博士(筑波大学)。滋賀大学教育学部助教授、東京教育大学教育学部助教授、筑波大学心理学系助教授、筑波大学心理学系教授を歴任し、2004年より現職。筑波大学名誉教授。専門は基礎心理学、比較心理学。著書は『社会性の比較発達心理学』(共編著、アートアンドブレイン)、『動物の行動と心理学』(分担執筆、教育出版)など。